

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520888

研究課題名(和文)多様化するインド人ディアスポラのグローバルネットワークと場所の再構築

研究課題名(英文) Diversity and restructure of Global networks and places concerning Indian community abroad

研究代表者

澤 宗則 (SAWA, Munenori)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：40235453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：インド人移民の新たな集住地である東京都江戸川区において、新しいコミュニケーションツールであるインターネットを媒介にして、対面接触によるコミュニケーションを前提とした古くからの定住地(神戸市)とは異なる「自分達の場所」が再構築されている過程を調査した。この新しいコミュニティにおいて、インド人学校(東京都江戸川区・江東区・横浜市)・インド料理店・食材店・寺院(江戸川区)を新しく設立することによりアイデンティティがナショナルなものに回収されつつあることを検証した。以上をギデنزの近代性に関する理論を援用しながら、脱領域化と再領域化の概念を用いてまとめ、移民社会と空間に関する理論の再構築を行った。

研究成果の概要(英文)：In Edogawa-ku, Tokyo which is a new Indian community in Japan, we investigated the process of establishing 'their own place'. Here, a new community is formed through the Internet which is a new communication tool. This differs from the Indian longtime permanent home in Japan (Kobe city) on condition of communication by facing to face contact. In this new community, they founded newly Indian schools (Edogawa-ku, Koto-ku, Tokyo Prefecture and Yokohama city), the Indian restaurants, the foods stores, and the temple (Edogawa-ku), and it was confirmed that the national identity is formed by that cause. Based on Giddens's theory on modernity, we established a theory of Indian community abroad.

研究分野：人文地理学

キーワード：人文地理学 移民 インド系移民 エスニシティ グローバル化 グローバルシティ

1. 研究開始当初の背景

日本地理学会において「移民・移住とエスニシティ」研究グループが設置されるなど、地理学においてエスニシティ研究はきわめて重要な研究分野となりつつある。在日外国人に関する研究は、韓国・朝鮮人や中国人を対象として、多くの蓄積がなされてきたものの、それ以外の在日外国人は少数であるため、最近になってフィリピン人、ブラジル人などを対象とする研究がようやく行われるようになったに過ぎない。従来の研究の多くは差別・抑圧された側面を重視し、ステレオ・タイプの抑圧された「在日外国人」の概念の再生産が行われるに過ぎない。一方、在日インド人に関しては、高所得者の IT 技術者が多くを占め、抑圧された存在として把握は不可能であり、従来のエスニシティ研究とは異なるアプローチ・理論構築が必要である。また移民社会の研究において、従来の多くは定住地のみに重点が置かれていた。しかし本研究においては、出身地の視点からの分析が不可欠であると考えている。申請者はインド農村地域の調査研究を 1992 年から継続的に行っており、この調査・研究を通じて得た出身地におけるインド人社会との比較を軸として置くことで、本研究の対象である越境する移民社会の特徴、つまり出身地から離れ異文化に身を置くことによる社会の変化をより鮮明に把握することができる。

東京の在日インド人のコミュニティの調査においては、インド人が現在の江戸川区西葛西に集住地を形成する前から調査を継続的に行っており、IT 技術者を多く輩出しているバンガロール出身者のコミュニティの立ち上げ時点から参加している。このように、インド本国の社会との対比を基盤におきながら、コミュニティの立ち上げ以前から継続的に調査研究を進めている。その成果は、「グローバル化下での在日インド人社会 - エスニック集団と「場所」との再構造的関係」(秋田・水島編『現代南アジア 第6巻 世界システムとネットワーク』東京大学出版会、2003.)、「グローバル経済下の在日インド人社会における空間の再編成 脱領域化と再領域化に着目して」(アジア政経学会編『現代アジア研究叢書 第1巻 越境』慶應義塾大学出版会、2007.)、真田信治・庄司博史編『日本の多言語社会』(岩波書店、2005.)など地理学以外の分野における出版に際し、在日インド人社会を最も知る研究者として、頻繁に原稿の執筆依頼、国際シンポジウムの発表(「移民とともに変わる地域と国家」民族

学博物館、2007)の依頼、雑誌の取材を受けている。

2. 研究の目的

本研究は、移民労働者の受け入れの是非についての議論(あるいは外国人労働者、犯罪、社会統合におけるコストに関する議論)などの先進工業国における他者としてのエスニシティ研究ではない。移民(在日インド人)がホスト社会から自分達とは相容れない異質な存在として認識される状況のなかで、インターネットを媒介にどのように「自分達の場所」を作りあげてきているのかに焦点をあてて考察するものである。インターネットは「時間と空間の圧縮」(D.Harvey)を進める新しい情報手段であり、現在のグローバル化した経済の不可欠なインフラとなっている。従来の通信手段において距離と時間やコストなどが関連していたのに対し、インターネットでは両者の関係性がなくなりつつあるばかりでなく、時間もコストもほとんどかからないため、通信における時間と空間の意味が失われつつある。「場所」は、人々によって作り上げられたという意味で社会的構築物であるが、同時に「場所」は人々の行動や思考の舞台であるので、その可能性を広げるとともに制約も行うものである。

本研究の主たる論点は、次の2点である。**1つ目は**、越境した移民達は、先進工業国で「自分達の場所」をどのように再構築しているのだろうか。それは、越境することにより彼らの社会やアイデンティティのあり方にどのような変化をもたらしてきたのだろうか。**2つ目は**、東京のインド人社会はきわめて新しい移民社会であるが、彼らの新しいコミュニティを形成する上で、近くにいる者との対面接触(face to face contact)に加え、遠くにいる者や未知の者同士を直接結ぶインターネットが重要な役割を果たしている。このような新しいエスニック・コミュニティの成立においてインターネットはどのような役割を果たしているのだろうか。そしてそれは、「自分達の場所」を再構築することにどのように関わっているのだろうか。

本研究では、ギデンズ(Giddens, A.)の近代性(modernity)に関する理論を援用して、在日インド人社会の空間がグローバル化のもとで再編成される過程を脱領域化と再領域化の概念を用いながら考察する。具体的には、グローバル化した経済のもとでの IT 産業の隆盛と関連づけながら、インド人移民の現代的意味を明らかにし、インド商人に

加えて IT 技術者を中心にした新しいインド人移民の動向を分析する。

3. 研究の方法

研究の方法は、(1) エスニシティ研究における社会理論の構築と、(2) 在日インド人社会に関するフィールドワークである。

(1) グローバル経済によるグローバルネットワークの再編成と移民との関連性、グローバルシティ(東京、ニューヨーク、ロンドン)の空間の再編成と移民との関連、移民による定住地の形成と「場所」の再構築の3つの論点において、研究史を総括すると共に、ギデنزの近代性に関する理論を踏まえながら、移民社会と空間における理論の再構築を行った。東京では現在いくつかのインド人コミュニティやインド人学校、寺院が立ち上がりつつある。それらを観察するとともに、個人への詳細なライフヒストリーの聞き取りを行った。また、以前より聞き取り調査を行っているインド人に対し、追跡調査を行った。横浜では、元・中田市長の政策により、インド資本の誘致が強力に行われ、その一環としてインド人学校の誘致が決定し、2008年に開校した。ここで行政主導によりどのようにインド人集住地が形成されるのか、あるいは形成されないのかに関し、集住地を成立させる条件について考察を行うとともに、コミュニティ成立の追跡調査を行った。神戸では、従来から宗派別コミュニティが確立されている。そこでは、伝統的な宗教行事が行われ、あたかも出身地でのインド社会そのものの再現の感がある。しかしながら神戸生まれのインド人が多くなるにつれて、エスニシティの持つ意味はそのまま継承されるのではなく、常に新しい意味を再生産されながら現在意味のあるものは残り、そうでないものは消えてゆく。その創造的破壊のプロセスを歴史的に見てゆくことにより、出身地でのインド社会から定住地でのインド社会へどのように発展・変化してゆくのかを分析する。その際には、移民社会史と個人のライフヒストリーおよびメンタルマップの聞き取りを行った。

(2) 東京・横浜・神戸などのインド人集住地での空間の再編成に関して、フィールドワークをもとにして、社会理論の検証を実証的に行った。澤と南塾が担当した。

4. 研究成果

インド系移民は、中国系移民、ユダヤ系移民とともに世界三大移民と称され、2500万

人に達している(Ministry of Overseas Indian Affairs 2006)。インド系移民は、ホスト社会と出身地の両方と深く関わりながら、どのような社会と空間をつくりあげてきたのであろうか、またそれは経済のグローバル化とどのような関わりがあるのだろうか。インドは経済自由化が進められた1980年代以降、特に1991年の「新経済政策(new economic policy)」への転換以降、先進国からのFDI(Foreign Direct Investment)により急激な経済成長を経験した。これは先進国を頂点としたグローバル化経済にインドが組み込まれつつあると、とらえることが出来る。同時に、従来は商人や単純労働者(unskilled labourer)が中心であったインド系移民社会も、現在はIT技術者の急増により大きく再編成されている。さらに、成功した彼らの一部がインドのIT産業や不動産に出資を行い、あるいは帰国し大手IT企業を起業するなど、現在のインドの経済成長と密接に関わっている。これらは経済のグローバル化による空間の再編成(spatial reorganization)と、不可分な関係にある。

グローバル経済下では、資本の流動性が高まると同時に、人の流動性も加速化されている。国境を越えてグローバルスケールで移動する移民が増大するに従い、彼らの生活空間としての集住地というローカルな「場所(place)」が出現してきた。グローバルシティ・東京においても、IT産業の急速な拡大に伴い、インド系IT技術者が急増した結果、新たなインド人集住地が形成された。この新たなインド人移民社会の形成には、インターネットがきわめて重要な役割を果たしている。インターネットは「時間-空間の圧縮(time and space compression)」を進める新しい情報手段であり、現在のグローバル化した経済の不可欠なインフラとなっている。従来の通信手段において時間やコストなどが距離と関連していたのに対し、インターネットでは両者の関係性がなくなりつつあるばかりでなく、時間もコストもほとんどかからないため、通信における時間と空間の意味が失われつつある。「場所」とは、個人や集団の情緒的感情のつながりの対象(Topophilia)や資本蓄積にも必要なものとして、その具体性・個別性が強調された存在であり、例えば人口や人口増減率、産業構成比率などの、数値で表現することが不可能な存在として捉えるものである。

先進工業国へと越境するインド系移民の社会と空間の再編成のプロセスを分析する

ことより、開発途上国から先進国への移民社会・空間と経済のグローバル化との関連について明らかにした。具体的には、近年のインド国内のIT産業の成長、日本国内のインド系IT企業の成長とグローバルシティ・東京でのインド系IT技術者の移民の増大に着目しながら、先進工業国へと越境するインド系移民の創り上げる空間が、グローバル化した世界に組み込まれながら再編成される過程の分析を行った。その際には、空間スケールの階層性に留意し、ナショナル、リージョナル、ローカルの3つのスケールにおいて、それぞれ脱領域化と再領域化の概念を用いて考察した。

インド人移民の新たな集住地である東京都江戸川区において、新しいコミュニケーションツールであるインターネットを媒介にして、対面接触によるコミュニケーションを前提とした古くからの定住地とは異なる「自分達の場所」が再構築されている過程を調査した。この新しいコミュニティにおいて、インド人学校(東京都江戸川区・江東区・横浜市)・インド料理店・食材店・寺院(江戸川区)を新しく設立することによりアイデンティティがナショナルなものに回収されつつあることを検証した。以上をギデنز(Giddens, A.)の**近代性(modernity)に関する理論を援用しながら**、移民社会と空間に関する理論の再構築を行った。

移民社会は初期段階では使用可能な資源が限られ、その場しのぎの短期的な展望の下、協調が「戦術(strategy)」（弱者が自分のものを持たない土地でなんとかやっていくための実践(ミシェル・ド・セルトー,1987)）とならざるを得ない。人口増加とともに利用可能な資源が増える一方、属性が多様化し利害が競合し始めると、長期的な展望の下、「戦略(tactics)」（自分の固有な土地を持つ権力主体が外部や客・競争相手との関係を管理するための実践(同)）へと「空間的实践」(エスニックな空間における移民らが自分たちの空間を作り上げていこうとする行為)が次第に移行することが明らかになった。

経済のグローバル化に関し、資本が展開する際には具体的な場所を必要とし、それは先進国では多国籍企業の中核管理機能の集積したグローバルシティである)。グローバル化した経済は、先進国(特にグローバルシティ)での労働市場の国境を越えた拡大をもたらし、開発途上国からの移民を増大させた。このような労働力の流動性の高まりによってもたらされた労働市場の脱領域化は、移民

間および移民と出身地間の情報の流動性を高めた。それは、移民によるインドへの送金、先進国で成功した移民によるインドへの出資や出身地などでの起業という形で、資本の流動性を高めることにつながっている。先進国に定住し始めた移民は、生活空間としてのローカルな集住地を必要としている。移民が増大するに従い、彼らの文化に再び埋め込まれた集住地の形成という形で、ローカルな空間の再領域化が進むのである。このように移民の空間では、脱領域化と再領域化が同時に進行する。

グローバル化とは、「近代性の帰結」として、「時間 空間の圧縮」を加速度的に推し進め、ナショナル、リージョナル、ローカルの各スケールの空間の文脈上にあった社会的行為を上位の空間スケールの中に位置付けることにより、各スケールの空間の脱領域化と再領域化をやすみなく続けることである。これらの過程を通じて、各スケールの空間はより上位の空間そしてグローバルな空間に次第に組み込まれてゆく事が分かった。

これらの成果として、雑誌論文1件、学会発表1件、図書7件を発表することが出来た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

Sawa Munenori, Spatial Reorganisation of the Indian Community Crossing Border: A Case Study of the Global City Tokyo, Japanese Journal of Human Geography, 65-6, 2013, 508-526(査読あり)

〔学会発表〕(計 1件)

南埜 猛・澤 宗則、リーマンショック後のインド系移民の動向、地理科学学会、2014年6月8日、広島大学(広島県東広島市)

〔図書〕(計 7件)

上野和彦・椿 真智子・中村康子編、朝倉書店、『地理学基礎シリーズ 1 地理学概論改訂版』2015、172(119-123)

岡橋秀典・友澤和夫編、東京大学出版会、『現代インド 第4巻 台頭する新経済空間』2015、325(53-75)

国立民族学博物館編、丸善出版、『世界民族百科事典』2014、789(356-357)

友澤和夫編、朝倉書店、『世界地誌シリーズ 5 インド』2013、325(101-112)

人文地理学会編、丸善出版、『人文地理学事典』2013、761(234-235)

立川 武蔵 他編、朝倉書店、『朝倉世界地理講座 第4巻 南アジア』2012、470(420-430)

山下清海編、学文社、『現代のエスニック

社会を探る - 理論からフィールドへ - 』2011、
213 (168-188)

〔その他〕

ホームページ

<http://indiansinjapan.blog73.fc2.com/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

澤 宗則 (SAWA Munenori)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
教授

研究者番号：4 0 2 3 5 4 5 3

(2)研究分担者

南埜 猛 (MINAMINO Takeshi)

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教
授

研究者番号：2 0 2 7 3 8 1 5